慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	精神的交通論序説： コミュニケーションの生成と発展に関する基礎理論
Sub Title	
Author	八川, 敏昭(Yagawa, Toshiaki)
Publisher	慶應義塾大学法学部
Publication year	2008
Jtitle	慶應の政治学 政治・社会： 慶應義塾創立一五〇年記念法学部論文集 (2008.) ,p.263- 282
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Book
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=BA88454491-00000007-0263

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

精神的交通論序説

――コミュニケーションの生成と発展に関する基礎理論――

八川敏昭

一　コミュニケーション生成のための歴史的諸前提
二　原始共同態におけるコミュニケーションの態様
三　コミュニケーション形態の変化とその前提諸条件
四　社会的分業の展開とコミュニケーション形態の変貌

一　コミュニケーション生成のための歴史的諸前提

言語という様式をとるか否かは別として、人間相互のコミュニケーションがコミュニケーションとして成り立ち得るためには[1]、それに先立って、予め自己と他者という諸個人の存在が前提され、なお且つそれら諸個人の間に、何らかの共通した意味の了解が想定されている、ということは言うを俟たない。そしてまた諸個人と、諸個人に共通した意味の了解とが存在する以上、それら諸個人は、何らか共通的な社会関係――共同組織 Gemeinwesen――のもとに編制されている必要があることもこれまた当然のことである。このように、コミュニケーションが成立するためには、既に「共同組織」の存在が前提され、その意味でコミュニケーションは、それ自体「共同組織」の産物たる性格を有している[2]。

ところで、コミュニケーションがこのように何らかの「共同組織」のうちにその淵源を有するものであるにしても、それではいったい、このひとつの「共同組織」がコミュニケーションの必要性を日々新たに産み出すところの必然性（＝実践的条件）は何かと言えば、それは結局、共同組織に基づく「協働」Zusammenwirken であるにほかならない。すなわち先ず、「自然的諸個人」naturliche Individuen が彼自身の再生産にとって不可欠な前提であるところの物質的生活のための「生産行為」Produzieren（→自然の質量変換たる「労働」Arbeit）を行なうとき、既に彼（＝労働主体としての自然的個人）は「自然的であるが故に……必ず何らかの形の〝共同組織〟に所属」（大塚久雄『共同体の基礎理論』岩波書店、一九五五年〔以下『基礎理論』と略記〕一一頁、傍点原著者）しており[3]、そのためその成員諸個人の「『有用的諸労働は相互に独立的に私事として営まれる』ことなく、社会的分業は〝共同組織〟として編制され、……外枠にはめこまれて」（大塚『基礎理論』七頁。引用文中の『　』内はマルクス『資本論』第一巻第一篇第一章第四節）いる。従ってそれら諸労働は、常にすぐれて「協働」（この場合は特に「共同労働」）た

らざるを得ないのであるが、まさにその「協働」における必要性のうちにこそ、コミュニケーション（＝精神的交通）を介在させずにはおかない「必然性」が生ずることになる。すなわち、「人間はただ社会の内部でのみ自分たちの欲望をみたし……、生存するやいなやその最初からたがいに必要としあい、そしてただ交通をむすぶことによってのみ自分たちの欲望や能力などを発展させえた」（マルクス＝エンゲルス『ドイツ・イデオロギー』古在由重訳、岩波文庫、一九五六年〔以下『ドイツ・イデオロギー』と略記〕二四四頁、傍点引用者）のである。そしてその間の論理的脈絡について、ジョージ・トムソンは実に適切なる比喩を以って、次のように述べている。すなわち、「道具は労働者の活動をその労働対象に伝える伝導体の役をするものである。あたかも生産用具が、労働者とその労働対象とのあいだに、彼の活動の伝導体としてさしはさまれるように、そのように彼とその仲間の労働者とのあいだには、生産するのに不可欠な活動の相互交換をもたらすところの通信手段として、言語がさしはさまれる。[4]」（ジョージ・トムソン『最初の哲学者たち』出隆＝池田薫訳、岩波書店、一九五八年、三七頁）。

以上のように、コミュニケーションの淵源は「共同組織」のうちにあり、またこの「共同組織」がコミュニケーションを産み出す必然性はその成員諸個人による「協働」にあるのであるが、[5]それでは、コミュニケーションが成り立ち得るためのこれら前提諸条件の生成に対応して、個別的な労働主体の側のコミュニケーション意識Bewusstsein はいったい如何なる所以のもとに生起するかと言えば、それはすなわち、それらコミュニケーションが成立するための前提諸条件に促されつつ、いわば自然成長的に生成するところの「他の人間との交通の欲望、その必要」性の意識、或いは論理的に言えば「まわりの諸個人と結合すべき必然性の意識」（マルクス＝エンゲルス『ドイツ・イデオロギー』三八頁、傍点引用者）からであるにほかならない。[6]そしてこのような個別具体的個人（＝「共同組織」成員）の「意識」が、既に予めその共同組織において共有されている何らかの媒体を介することによって、他の諸成員にとっても共通するものとして立ち現われるや、それが「他の人間にとっても存在し、したが

ってまた私自身にとってもはじめて存在する現実的な意識」（＝「実践的意識」＝「言語」）（マルクス＝エンゲルス『ドイツ・イデオロギー』三七―三八頁）となって、意味の了解（＝コミュニケーション）が成り立つことになる。

二　原始共同態におけるコミュニケーションの態様

さて、コミュニケーションが生成するためのこうした論理的諸条件を歴史的前提としたのちに、次には、コミュニケーションの史的変遷がいかなる諸様相（＝諸段階）のもとに展開されるのか、そしてまた、その展開を推し進めるところの諸条件は何なのか、といった歴史的推移の問題が立ち現われて来る。

ところで、コミュニケーションの淵源であるところの「共同組織」は、歴史上、何よりも先ず「原始共同態」ursprüngliche Gemeinschaft として出発する。この「原始共同態」は、極めて原生的な「原始群団」から、比較的発達した「種族共同態」に至るまでの様々な形態を示しながらも、ともかくそれらは純血族組織としての統一性（＝原始的「集団性」）を有するという点で共通した特徴をもっており、共同態諸成員自身の再生産に不可欠な諸労働の様式、すなわち「協働様式」は、著しく「共同労働」的たらざるを得なかった。それ故、原始共同態における生産力の性格は、「共同労働」に基づく「集団的生産力」（大塚久雄「共同体解体の基礎的諸条件」『大塚久雄著作集』第七巻、岩波書店、一九六九年〔以下「諸条件」と略記〕一一四、一一九頁）とも呼ぶべき様相を呈しており、「個別労働」le travail parcellaire（マルクス「ヴェラ・ザスーリッチへの手紙」『先行諸形態』一二四頁）に基づく「個人的生産力」という性格は遠く背後に退いていたと言える。そして原始共同態における生産力の水準は、この「集団的生産力」的性格に規定されて極めて低位なままにおかれていたが、これを言い換えれば、すなわち「生産諸力の分化」（大塚『基礎理論』四四頁）としての「社会的分業」の展開（→生産諸力の上昇）が、未だ極めて萌芽的な

状態にとどまっていた、ということを示している。

一方、「協働」における必然性を契機として産み出されるところの「コミュニケーション」の態様はと言えば、原始共同態の基本的な協働様式たるこの「共同労働」的特質（＝社会的分業の未分化）に照応して、その拡がりにおいてはあくまでも「共同組織」の中に限定され、更に、コミュニケーション労働それ自体、社会的分業体系において自立した一片を形成するまでには至らなかった。このように原始共同態においては、労働主体たる「共同組織」諸成員のうちで、社会的分業体系の一環としてのコミュニケーション労働に従事する階層が明確な形では存在しなかった、と推定し得るのは勿論であるが、そればかりか、原始共同態の端緒には、個々の労働主体の「意識」においてすら、そうしたコミュニケーション労働（→精神的労働）は、未だ物質的労働と不可分に結びつき、まさに単なる「現実的生活の表明（Äusserungen）」（マルクス＝エンゲルス『ドイツ・イデオロギー』二二七頁、傍点原著者）として、物質的労働のうちに埋もれていたと考えられる。

従って、原始共同態における人間（＝労働諸主体）が、例えば先史オーリニャック文化期の洞窟壁画やアルタミラの見事な「芸術作品」を作り上げるに至った動機も、彼らの美意識の「表明」意欲にあるのでなかったのは勿論のこと、そうした「美意識」自体、原始共同態の歴史の端緒にあっては、物質的労働（＝自然の質量変換）のうちに、いわば渾然一体となって埋め込まれ、明確な「意識」となって登場するまでには至らなかったと思われる。[7] 何故なら、原始共同態の端緒におけるこのような「観念、表象、意識の生産はまず第一に人間の物質的活動および物質的交通のうちに……直接におりこまれ……人間の表象作用、思考作用、精神的交通はここではまだかれらの物質的行動の直接の流出としてあらわれる」[8]（マルクス＝エンゲルス『ドイツ・イデオロギー』三一頁、傍点引用者）にすぎなかったからである。そして、歴史の黎明期における労働諸主体のこのような溶融したコミュニケーション意識については、ゴードン・チャイルドの次の文章が、実に活き活きとした表情を伝えている。

「芸術家は空白な壁をひっかく。すると、見よ、前に何もなかったところに、野牛がいるではないか。……芸術家が暗い洞窟の中で野牛を描いたのと同じ確かさで、外の草原には、彼の仲間が殺して食う生きた野牛がいることであろう。成功を確保するため、芸術家は時として（しかし、稀に）そうなって欲しいと思うように、投げた槍で貫かれた野牛を描いた。[9]」

三　コミュニケーション形態の変化とその前提諸条件

こうして、抑々原始共同態におけるコミュニケーション形態は、先ず、コミュニケーションそのものの存立基盤（＝淵源）たる「共同組織」によって規定され、次に、歴史の端緒に特有の「共同労働」的協働様式によって制約されて、未だ独自な様相を呈するまでには至らずに、なお深く物質的労働の本性のうちに包み込まれたままにおかれていたが、「共同組織」（↓淵源）と共同労働的「協働」（↓必然性）というふたつの関連する支柱の下に打ち据えられたこのような原始共同態におけるコミュニケーション形態が、漸くそれ独自の片鱗を見せはじめるに至るその「基軸」となるものは、何よりも先ず、次第に高揚しつつある生産諸力の動態であるにほかならない。すなわち、原始共同態の内部から成熟しはじめた生産諸力の高揚が、やがて原始共同態的「共同組織」（＝生産諸関係）[10]のうちに包摂しきれぬほどの水準に達すると、ついには「原始共同態」に変わって、それとは全く異なる性格を有するところの新たな「共同組織」（↓農業共同体）が、その生産諸力の水準に照応して現出する。そして更には、その新しい「共同組織」に伴いながら、これまた新しいコミュニケーション形態が、生産諸力の発展に対応して登場して来ることになるのである。[11]

ところで、原始共同態の内側から次第に成熟しはじめて「共同組織」を改編し、その結果ついにはコミュニケ

ーション形態をも変貌せしめるに至るところのこの生産諸力の発展とは、具体的には何を意味するのかと言えば、それは結局、社会的分業の展開であると言ってよい。すなわち、「どの程度まで一国民の生産力が発展しているかは、分業が発展している程度によってもっとも明白にしめされる。どんなあたらしい生産力でも、これがいままですでに知られた生産力のたんに量的な拡張（たとえば所有地の開墾）でないかぎり、分業のあたらしい発達を結果としてともなう」（マルクス＝エンゲルス『ドイツ・イデオロギー』二五頁）ものである。

更にこの「分業」は、「もともとは性行為における分業にほかならず、つぎには自然的な素質（たとえば体力）、欲望、偶然などなどによってひとりでに、すなわち『自然成長的』（naturwüchsig）にできあがる」（マルクス＝エンゲルス『ドイツ・イデオロギー』三九頁）ものであったが、就中、協働様式の性格が「共同労働」的色彩（↓「集団的生産力」）を拭い去って、次第に「個別労働」的色彩（↓「個人的生産力」）を強めて来るに従い、「分業」の形態は漸次「社会的分業」（厳密に言えば「分業にもとづく社会的協働」）（大塚「諸条件」一一八頁）の段階へと推転し、それに対応して生産諸力の上昇が相伴う。換言すれば、原始共同態の「その初期には集団それ自体が基本的な生産力として現われるのであるが、……その内部における生産力のいっそうの発展は、いまや何よりも〝分業〟の展開として、すなわち個人的な生産諸力の新たな形成と拡充という形をとって進展する」（大塚『基礎理論』二九頁、傍点原著者）ところの「社会的分業」として現われる。

このようにして、「原始共同態」におけるコミュニケーション形態を変化せしめる「基軸」であるところの「生産諸力の上昇」は、具体的には「社会的分業の展開」、換言すれば「個別労働」的協働様式（↓個人的生産力）の拡充として現われる、と言うことができるのであるが、ともかくも、このような形で推転して行く生産諸力の上昇に対応して、コミュニケーション（＝精神的交通）形態も、その歴史的発展段階に相応しい様相を次々と形作って行くことになる。すなわち、「桎梏となった前代の交通形態のかわりに、一層発展した生産力に――したが

ってまた諸個人の自己活動の一層進歩した方式に対応する一つのあたらしい交通形態があらわれ、今度はこれがまた桎梏となって、さらに他の交通形態にとってかわられる」（マルクス＝エンゲルス『ドイツ・イデオロギー』一一〇頁、傍点引用者）ことになるのである。[12]

四　社会的分業の展開とコミュニケーション形態の変貌

さて、以上の諸点を踏まえたうえで、その次には以下のような事柄が問題として立ち現われて来る。すなわち、コミュニケーション形態を新たな様相のもとに変貌させ得るためには、その「基軸」たるべき「社会的分業」が、いったい如何なる態様を以って展開されていなければならないか、換言すれば、コミュニケーション形態が変化するための前提たる「社会的分業」は、具体的にはどのような「展開形態」をとることになるのであるか、といった問題がそれである。

1　精神的労働の分化

さて、それまで物質的労働のうちに深く包み込まれたままでいた「原始共同態」におけるコミュニケーション（＝精神的労働）形態が、以前とは全く異なった新しい様相のもとに生まれ変わり得るためには、それに先立って、予め精神的労働が物質的労働の制約から解き放たれて、そこから自立しているということが不可欠な前提であることは言うまでもない。従って、コミュニケーション形態を変化せしめるところの「社会的分業」の展開形態として先ず始めに挙げられるべきは、この物質的労働と精神的労働との分離に基づく両者間の分業関係（＝協働関係）の生成ということである。[13]そして、このような分業関係が展開される結果として、精神的労働が物質的労働

から相対的に自立し得ることになるのであるが、それとともに「精神的交通」としての「コミュニケーション」労働もまた、漸くその自立化の現実的基礎（＝発端条件）を得ることになる。[14]

2　手工業の分化

物質的労働と精神的労働との間の分業関係の生成は、以上のように、「原始共同態」におけるコミュニケーション形態を、コミュニケーション労働の自立化という新たな段階に変化させるための現実的基礎（＝発端条件）を形成することになるのであるが、しかし、この物質的労働と精神的労働との間の分業関係の展開、換言すれば、物質的労働に対する精神的労働の自立化のみを以って、それがただちにコミュニケーション形態の新たな発展段階を指し示す、と言うことはできないのであって、コミュニケーションの態様に変化と拡がりとを与え、且つ、そうしたコミュニケーション形態の発展段階を根底的に指し示す指標となるものは、コミュニケーション形態が変貌しうるための「物質的基礎」を、直接且つ衝撃的に形成するところの生産諸力の上昇（＝社会的分業の展開）の程度であり、就中、物質的労働そのものにおける分業の展開度であるにほかならない。

このような、コミュニケーション形態の歴史的発展段階を規定するところの物質的労働そのものにおける分業の展開形態として第一に挙げられるべき局面は、先ず、コミュニケーション労働に必要な労働要具（筆記用具、等々）を生産するところの様々な手工業が、物質的労働（主として農業、及びそこから派生するところの原始的諸産業）から分立＝発展しはじめるということである。すなわちこれら様々な手工業は、「社会的分業の進展につれて〝農業〟からつぎつぎに分離し、さらに相互の分裂によってその種類がますます増大していく」（大塚『諸条件』一二〇頁）ことになるのであるが、そのような手工業の発展につれて、やがて、コミュニケーション労働そのものに必要な労働要具の生産を受けもつところの諸部門が出現し、その結果、コミュニケーション形態にも変化が招来

することになるのである。[15]

3　交通労働の分化

しかし、コミュニケーション形態の歴史的発展段階を規定するところの分業の展開形態は、単にこのような物質的労働からの手工業の分立＝発展（＝自立化）という局面だけにとどまらず、更にはまた別の姿をとった分業の展開形態をもその視野に収めておかなければならないのであって、それこそは「交通労働」と呼び得る新しい形態の労働の顕在化という局面であるにほかならない。すなわち、それまで物質的労働のうちに未分化のままに包含されていた交通労働が、物質的労働から分離してそれ独自の領域を形成するに至り、その結果、物質的労働と交通労働との間に新たな分業関係が成立することになるのである。[16] なお、この「交通労働」の自立化は、それが物質的労働からの直接的派生物であるという事情の結果として、すぐさま「精神的交通」（＝コミュニケーション）形態を変化させることになるというのではなく、さしあたりそれは「物質的交通」形態の変化として立ち現われて来ることになる。そしてこの「物質的交通」（＝「経済的交通」[17]）労働は、当初は運送業 merchant ＝ carrier という形態をとりながら、後にはそこから商業 merchant を分立させるという具合に進行して行くのであるが、[18] ともかく、「精神的交通」としての「コミュニケーション」形態の態様は、この物質的交通の展開形態に規定されながらも、しかし、このような（物質的）交通労働の自立化に対応して、新たな様相のもとに変化することになるのである。[19]

さて、これまで述べてきたように「原始共同態」におけるコミュニケーション（＝精神的交通）形態は、精神的労働と物質的労働とが分離することによってコミュニケーション労働の自立化という変化のための現実的基礎（＝発端条件）が与えられ、物質的労働のうちから手工業と交通労働とが分立しはじめることによって変化のため

の物質的基礎が形成されることになるのであるが、これらのことをコミュニケーション形態の歴史的発展条件という問題に即してみると、コミュニケーション形態の変化は、すなわち生産諸力の上昇（＝社会的分業の展開）と、それに対応するところの「共同組織」の推転（原始共同態→農業共同体）に伴ってもたらされるのであって、具体的には、社会的分業体系における手工業と交通労働との発展如何がコミュニケーション形態の変化と拡がりとを規定している、と言うことができる。

従って、コミュニケーション形態の歴史的発展段階は、この手工業並びに交通労働の発展段階に照応して指し示されると言い得ると同時に、それはまた、コミュニケーション形態が生産諸力の上昇（＝社会的分業の展開）の一定の水準に照応するところの「共同組織」（＝生産諸関係）に対応した形態をとることによっても表示され得る。すなわち、コミュニケーション（＝精神的交通）が「共同組織」の産物であるという点においても、且つ精神的労働がその時代の支配的「階級」（→生産諸関係）における分業の一環として現出して来るという意味においても、コミュニケーション形態の歴史的発展段階は、そのときの「共同組織」（＝生産諸関係）の性格に対応した様相を以って示され得るのである。そしてコミュニケーションのこの「共同組織」（＝生産諸関係）的性格は、コミュニケーション労働を為すに必要な生産手段（→労働要具）の所有諸関係として現象して来るのは無論のこと、更にはそのイデオロギー的諸相のもとで、より鮮明な色彩を帯びて立ち現われて来ることになる。[20]

こうして、「原始共同態」におけるコミュニケーション形態を変化させ、更にはその歴史的発展を推し進める「基軸」となるものは、何よりも先ず「分業にもとづく社会的協働」（＝社会的分業）の展開形態（＝生産諸力の上昇）であり、そしてまたその発展段階を指し示す「指標」となるものは、その時代の「共同組織」（＝生産諸関係）の性格にほかならない。そして最後にこれを要言すれば、コミュニケーション（＝精神的交通）形態の変化の基軸は「生産諸力」の上昇であり、変化の指標は「生産諸関係」の性格である。

（1）　はじめにことわっておく必要があるものと思われるが、いわゆる「コミュニケーション」という概念は、意味論や情報科学の発達とともに、著しい「深化」と「拡がり」とを示している。そしてこれら諸科学の緻密な定義に従えば、「コミュニケーション」という概念が、遂には遺伝子による形質伝達や固体内部の生理的プロセスに至るまでの、実に微細を極めた規定にまで到達することになるのであるが、しかし、そうした内容までも本稿の対象に含めるとなると、たちまちのうちに歴史的取扱いのうえで困難に直面することとなり、一方、あくまでもそうした規定に執着していると、今度は却って奇妙なトリビアリズムに陥ることにもなりかねない。従って、本稿で言う「コミュニケーション」とは「社会的コミュニケーション」、すなわち極めて常識的な意味での「人間相互間のコミュニケーション」（＝精神的交通）ということに限定することとする。

（2）　「個々人について明らかなのは、たとえば彼自身が、ある人間的共同体の生れながらの構成員としてのみ、彼自身のものである言語に関係するということである。個々人の所産としての言語は不可能（ウンディンゲ）である。……言語自体は、一個の共同組織（ゲマインヴェーゼン）の生産物であり、また別の見方からすれば、それ自体共同組織の定在、しかも証明を要しないその定在である。」（カール・マルクス『資本主義的生産に先行する諸形態』手島正毅訳、国民文庫、一九六三年〔以下『先行諸形態』と略記〕三五頁、傍点原著者。なお、同訳書中の一部の用語については、本稿で使用する用語との統一上、その訳語を変更して引用することがある。）

（3）　例えば次のようなマルクスの章句を見よ。「自然生的種族共同態、または原始群団〔Herdenwesen〕といったものが、人間の生活と、自己を再生産し対象化するその活動（牧人、狩猟者、農耕者等としての活動）との、客観的諸条件を領有する最初の前提……である。」（マルクス『先行諸形態』一〇頁、傍点原著者）。更に、「生産行為」と「共同組織」と「コミュニケーション」との関係については、次の記述を参照のこと。「生きている個人にとって自然的生産条件の一つは、彼が一個の自然生的な社会、種族等に所属していることである。この所属は、すでにたとえばその人の言語等のための条件である。」（マルクス『先行諸形態』三八頁、傍点原著者）。

（4）　なお、併せて次のエンゲルスの言葉を参照のこと。「労働の発達は必然的に社会の諸成員をたがいにいっそう緊密に結びつけることに寄与した。すなわち労働の発達によって相互の援助、共同でおこなう協働の機会はより頻繁になり、社会成員各個にとってのこのような協働の効用の意識はいよいよはっきりとしてきたからである。要するに、生成しつつあった人間は、たがいになにかを話し合わなければならないところまできたのである。」（フリードリヒ・エンゲルス「猿が人間化するにあたっ

ての労働の役割」菅原仰訳『マルクス＝エンゲルス全集』一九六八年〔以下「労働の役割」と略記〕四八四―五頁、傍点原著者）。

（5）　なお、コミュニケーション（↓言語）の成立する契機が「協働」であるか否かは別にしても、ともかくそれが、人間による何らか自発的な「意志」に発するのではなく、さりとてまた他者の「強力」にあるのでもなく、「生産行為」（↓労働）を含むところの何らかの「行為」にのみ求められることは、文脈の違いはあれ、陰鬱曖昧な気分の中で聖書を開いて確かめたファウストが感得したことに相違ない。すなわち……

こう書いてある、「はじめに言葉ありき」と。
すでにここでおれはつかえてしまう。誰の助けをかりて先へすすめばいいだろう。
おれは言葉をそんなに高く評価することができぬ。
なんとか別の訳し方を考えずばなるまい。
おれの心が霊の光に照らされているなら、うまくできるかもしれぬ。
こう書いてある、「はじめにこころありき」と。
軽率に筆を下さぬように、
第一行を慎重にしなければならぬ。
あらゆるものを創り出し、あらゆるものを生動させるのが意だろうか。
むしろ、こう書いてあるはずだ、「はじめに力ありき」と。
しかし、紙の上にそれを書いているうちに、
どうやらそれも不完全なような気がしてくる。
霊のたすけだ！　おれはとっさに思いついて、
安心してこう書く、「はじめに行いありき」と。

（ゲーテ『ファウスト』大山定一訳、世界文学大系一九、筑摩書房、一九六〇年、三二頁、傍点原著者）。

ここに至ったファウストはまさに卓見である。そして今度は、エンゲルスがそれを受けてこう続ける。「言語が労働のなかから、また労働とともに生まれたとするこの説明が唯一の正しい説明である」。（エンゲルス「労働の役割」三二頁）。

（6）また序でながら一言すれば、労働諸主体間における交通（→コミュニケーション）は、先にも示唆しておいたように諸個人の自発的意志に基づいて生ずるものでは決してない。それはむしろ前述した前提諸条件に対応し、それに促されつつ生起するのであり、従って諸個人は「純粋な自我としてではなく、かれらの生産力と欲望との一定の発展段階における個人として交通をはじめ」ることになる。そしてコミュニケーションは、このような労働諸主体（＝自然的諸個人）の意識において、いわば自然成長的に生成して来るのであるが、コミュニケーションのこの自然成長的性格は、後になって、いろいろな諸条件の影響のもとに拭い取られることになる。例えば、「言語の自然成長性は、近代のあらゆる発達した言語においては、一部はロマン語およびゲルマン語のばあいのように既存の材料から言語発展の歴史によって廃棄され、一部はイギリス語におけるように諸国民の交雑と混合によって廃棄され、一部はまた経済的および政治的な集中にもとづいて一国民の内部における諸方言（Dialekte）が国語（Nationalsprache）に集中することによって廃棄されている。」（マルクス＝エンゲルス『ドイツ・イデオロギー』二二三、二一七頁）。但し、コミュニケーション形態が変化するに必要な一般的諸条件については後段で詳述する。

（7）「もしわれわれがオーリニャック文化期の狩猟者たちの生活様式を一つの有機的統一体としてながめなければならないのに、その文化を、芸術、宗教、科学、または迷信などに分類して考えるならば、洞窟絵画や小さな立像などと正面から取組むことにはならない。また、もし彼らがただなぐさみに、自分の住む洞窟の壁に絵を描いただけだと考えれば、われわれはその意味を解く手がかりをもつことができない。」（ランスロット・ホグベン『コミュニケーションの歴史』寿岳＝林＝平田＝南共訳、岩波現代叢書、一九五八年〔以下『コミュニケーションの歴史』と略記〕一一頁）。

（8）なお、原始共同態におけるコミュニケーションの態様を知るうえで、更には本稿の今後の論述の展開のうえでもまた、特にこの引用文中の「物質的交通」と「精神的交通」との対比について留意すべきである。

（9）Vere Gordon Child, "Man makes himself", London, Watts, 1941, The Thinker's Library.（ホグベン『コミュニケーションの歴史』一三頁参照）。なお、チャイルドのこの記述は、絵画をはじめとする「映像芸術」の淵源が、字義の素朴な意味での「労働」（＝自然の質量変換）にあることを示していて興味深い。すなわち絵画の淵源を、ここでは「自然」として存在する「空白な壁」に、労働主体たる人間が、自身の想像力を介して「映像」を描き（＝生産行為）、それによって自然に手を加えること（＝労働）に求め得る。そしてまた、このように人間の想像力を介してはじめて成り立つところの「労働」こそが、「精神的労働」と呼ばれ

るべきものである。更に付け加えると、この段階において原始共同態の労働諸主体が、この「精神的労働」の萌芽を通して、ともかくも「自然」に対して立ち向かっていたという事実は、労働諸主体の「意識」の一定の進歩を前提にしてのみはじめて言い得ることである。すなわち、意識は「最初はたんに身ぢかな感性的環境についての意識にすぎず、また意識的になりつつある個人のそとにある他の人物および事物とのかぎられたつながりの意識」にすぎないのであって、就中それは、さしあたり、自然についての意識として現われる。このように意識は、先ずその原初的な対象として「自然」を捉えるが、しかし当初は、人間のこの自然意識がすぐさま逆に、「まったくよそよそしい全能かつ不可侵な力」となって、人間を「禽獣のように……威圧」する。従って、自然についての人間（＝労働主体）のこの意識は、すなわちまた「自然についての純粋に動物的な意識」でもあるが、このような意識の疎外が、歴史の発端における人間の自然意識を、全く弱々しいものとして形作ることになる（マルクス＝エンゲルス『ドイツ・イデオロギー』三八頁、傍点原著者）。しかしそれに比較して、チャイルドのこの描写に現われる労働諸主体は、もはや単に自然によって「威圧」されているだけの「純粋に動物的」な段階を脱し、道具の使用を通して、雄々しく「自然」に立ち向かっているのである。だがそれにもかかわらず、原始共同態の発端の労働諸主体に見られたこの「動物的な意識」は、やがてトーテミズム、アニミズム、等々の原始的諸観念へと受け継がれ、次第に希薄化しながらもその後の歴史的変遷を掻い潜り、宗教等々という形をとってその残滓を燻らせている。

(10) 「共同組織」という言葉をこのように「生産諸関係」という用語で置き換えて理解することも、さして不当なことではないように思われる。例えば次の章句を参照のこと。「特定の形態の〝共同体〟を支える生産諸関係は、それに照応する独自な〝共同組織〟のうちに集約されている。」（大塚久雄「共同体内分業の存在形態とその展開の諸様相」『大塚久雄著作集』第七巻、岩波書店、一九六九年、一三七頁）。

(11) 「古い共同組織の維持は、それの基礎である諸条件の破壊をふくみ、その反対物に転回する。もし同一面積での生産性がたとえば生産力の発展等によって増大しうることが考えられるとしても、それは労働の新しい様式、新しい結合、一日の大部分を農業についやすこと等々をふくむことであろうし、またそれとともに共同組織の古くからの経済的諸条件をも止揚することであろう。再生産の行為それ自体のなかでは、たとえば農村が都市となり、荒野が開かれた耕地となる等、客観的諸条件が変化するばかりでなく、生産者も、自分のなかから新しい資質を引き出し、生産によって自分自身を発展させ、改造し、新しい

力や新しい観念を形成し、新しい交通様式、新しい欲望、また新しい言語をも形成して、みずからを変化させる。」（マルクス『先行諸形態』四二頁）。

(12) 従ってこのことは、古い「原始的共同態」においてばかりではなく、新しい「資本主義的生産様式」においても当てはまる。例えば、資本主義的生産様式において生産方法が変革されて生産諸力が上昇し、マニュファクチュア時代から大工業時代へと移行したことに対応し、「前代の交通形態」のかわりに「あたらしい交通形態」が現われる様相を、マルクスは次のように書いている。すなわち、「マニュファクチュア時代から継承された運輸・通信手段も、まもなく熱病的生産速度、膨大な規模、一つの生産部面から他の生産部面への大量の資本と労働者の絶え間ない投入、新しくつくり出された世界市場の連関、をともなう大工業にとっては、やがて絶えがたい束縛に転化した。それゆえ……運輸・通信制度は、川蒸気船、鉄道、大洋汽船、および電信の体系によって、徐々に大工業の生産方法に適合された。」（カール・マルクス『資本論』第一巻第三分冊、資本論翻訳委員会訳、新日本出版社、一九八三年、六六四頁）。なお、更に付言すれば、マルクス＝エンゲルスは、「交通形態」が生産力に対して単なる対応関係にある、というにとどまらず、他の箇所では次のような注目すべき論述を行なっている。「歴史上のあらゆる衝突は、……生産力と交通形態とのあいだの矛盾のうちにその根源をもっている」（マルクス＝エンゲルス『ドイツ・イデオロギー』一一二頁）と。すなわち、「生産様式」との関連から言って、後に「生産関係」Produktionsverhältnis という概念構成によって鋭く示されてくるものをば、マルクス＝エンゲルスはここでは「交通形態」VerkehrsForm という用語によって表現しているのである。

(13) なお、この物質的労働と精神的労働との分離（＝分業）を産み出すものも、また、「原始共同態」のうちに性や体力差などによって自ずから生ずるところの「自然成長的」分業であるにほかならない。すなわち、自然成長的「分業とともに、精神的活動と物質的活動が……別々な個人の仕事になる可能性、いな現実性があたえられる」ことになる。但し、物質的労働と精神的労働との分業関係が、それまでの単なる「自然成長的」分業関係と決定的に異なる点は、分業が、この「物質的労働と精神的労働との分割があらわれる瞬間から、はじめて現実的に分業となる」、すなわち、この「分割」をまってはじめて、それまでの「自然成長的」分業が、個別の労働諸主体間における意識的な分業となる、ということにある（マルクス＝エンゲルス『ドイツ・イデオロギー』三九―四〇頁、傍点引用者）。

(14) 更に付け加うるべきは、「原始共同態」という、いわば無「階級」を前提とするところの「共同組織」が、生産諸力の上昇（＝社会的分業の展開）に対応して、「階級」関係を内包する新たな「共同組織」へと変貌するに伴い、「支配階級」における分業の展開の一環としても、物質的労働と精神的労働との間の分業関係が成立することになるのであるが、その際、精神的労働はあくまでも物質的労働を補完するものとして立ち現われるにすぎない、ということである。すなわち、「いままでの歴史の主要な力の一つとしてみいだしたところの分業は、いまやまた支配階級のなかにおいても精神的労働と物質的労働との分業としてあらわれる。その結果、この階級の内部においてその一部がこの階級の思想家としてたちあらわれるのにたいして、他の人々はこれらの思想や幻想にむしろ受働的かつ受容的な態度をとる。というのは、これらの人々は現実にこの階級の能動的な成員であって、自分自身についての幻想や思想をみずからつくるような余裕をあまりもたないからである。」そしてまた、「この階級の内部においてそれのこのような分裂は、二つの部分のある程度の対立と敵対にまでも発展することがある。しかしおよそこの階級そのものが危険にさらされているような実践上の衝突がおこれば、そのような対立や敵対はひとりでになくなってしまう。そしてこのときには実際また、あたかも支配的な思想が支配階級の思想ではなくて、この階級の力とはちがった力をもつかのようなみせかけも、きえうせてしまうのである。」（マルクス＝エンゲルス『ドイツ・イデオロギー』六六―七頁）。なおこの引用句は、ブルジョアジーの勃興とともに生成して来た「近代ジャーナリズム」の擬制的性格――ブルジョア・イデオローグとしての限界と可能性――を説明するうえで、重要な問題点を孕んでいる。

(15) また、このような様々な手工業の発展は、それが単にコミュニケーション労働に必要な労働要具の生産諸部門を生成させるものとしてのみ意味をもつというにとどまらず、更にそうした様々な手工業の発展自体が社会的分業の展開（＝生産諸力の上昇）過程の「主要な流れ」を成すものである、という点で重要性を有している。すなわち、「生産諸力の発展の主要方向は、大づかみにみて、〝農業〟のうちから種々な〝手工業〟が分離かつ独立し、そうした〝手工業〟がさらにさまざまに分裂をとげつつ、その種類がますます多岐となっていくというような姿での、社会的分業の進展として現われ」て来るのである。従って、このような様々な手工業の発展こそが、コミュニケーション形態を変貌せしめるに至るところの「生産諸力の上昇」（＝社会的分業の展開）ということそれ自体の具体的な姿である、と言うことができる（大塚『諸条件』一一八、一二〇頁）。

(16) 「分業のそのつぎの拡大は生産と交通との分離であり、商人という特殊な階級の形成だった。」（マルクス＝エンゲルス『ド

イツ・イデオロギー』七七頁）。

(17) 「物質的交通」というマルクスの用法を考慮に入れながら、大塚久雄は、それをより厳密且つ限定的に捉えなおして、新たに「経済的交通」という言葉を用いている。彼によればこの「経済的交通」とは、「社会をなして生産する諸個人のあいだでおこなわれる、Güter 移転の関係」をさすのであり、「商品流通（したがって商業）もそのうちに包含されるが、商品流通の形をとらない自然経済的な交換関係も、その他の Güter 移転の関係も、すべてその中に含まれる」ものとされている（大塚「諸条件」一二七―八頁、傍点原著者）。それ故この「経済的交通」という言葉のもつ用法を「精神的交通」（＝コミュニケーション）という概念に敷衍して定義してみれば、さしずめそれは、「共同組織諸成員（＝労働諸主体）間における意味の移転の関係」ということになるであろう。

(18) 物質的交通労働が運送業から商業へと展開して行くその過渡的な事情については、次の断章が鋭く示唆するところである。すなわち、「商人とは〝埃だらけの足〟pied poudreux つまり行商人と同義語だった」（増田義郎「文明のコミュニケーション史」（2）西洋―大航海時代」『コミュニケーション史』（講座・コミュニケーション2）、研究社、一九七三年〔以下「大航海時代」と略記〕一二七頁）。

(19) コミュニケーション（＝精神的交通）形態が、このように物質的交通形態に規定されながらも、次第にその独自な容姿を露わにして来るという展開形態を、もっとも「如実に」（しかし「典型的に」であるか否かは議論の余地があろう）示した時期はと言えば、それはおそらく、あの所謂「大航海時代」と呼ばれる時期であったろうと思われる。このことについては特に前掲の増田論文を参照のこと。なお、いささか煩瑣にわたると思われるが、同論文中の次の諸章句は、この点に関する当時の事情についての実感を伝えて興味深い。すなわち、「もっとも正確な情報をキャッチしたのは商人たちであった。彼らは商売上の必要から、あらゆる手段によってできるだけ正しい情報を集め、じぶんたちの連絡網によって仲間にそれを伝えた。……そういう情報のうちのあるものは、ただちに印刷に付せられた。商人たちの中でも特に大きな連絡網を持っていたのは、ヴェルザーやフガーなどの大商人であった。……大商会の海外情報蒐集は、その後も続行されたが、今日『フガー家の報知』（Fugger-Zeitungen）という名で知られる、フガー商会、特にフィリップ・エドヴァルト・フガー（一五四七―一六一八）の手になるニュース文書集は、その中でももっとも有名である。……しかし『報知』成立の環境は、当時のコミュニケーションのあり方に

関して、有益な光を投げかけてくれるので興味深い。すなわち、『報知』のニュース・ソースは三種類に分れ、フガー家の各地の代理人、手代の送ってきた知らせ、当時ドイツの商業都市で発行されていた大判、片面刷の新聞、それに一種のニュース・エージェンシーから提供された情報などがあった。最後のものはアウクスブルクのイェレミアス・クラッサー、イェレミアス・シフレが主宰する代理店が、一定の購読料を払った読者に、ニュースを編集、頒布したもので、中世末期から当時までに、ヨーロッパの遠距離貿易の発達により必要になった情報蒐集が専門の職業を生み出すほどの量と規模にまで拡大していたことを示している。片面刷の新聞類も、もっぱら商業上の需要に応じたもので、有力な商業都市では例外なく発行された。したがって、香料船の到着とか、新国土の発見などの事件は、必ずニュースレターで知らされた。」（増田「大航海時代」一四四―五頁、傍点引用者）。

(20) 「支配階級の思想はどの時代にも支配的な思想である。すなわち、社会の支配的な物質的な力であるところの階級は、同時にその社会の支配的な精神的な力である。物質的生産の手段を左右する階級は、それと同時に精神的生産の手段を左右する。だから同時にまた、精神的生産の手段を欠いている人々の思想は、おおむねこの階級に服従していることになる。支配的な思想とは支配的な物質諸関係の観念的な表現、思想としてとらえられた支配的な物質的諸関係にほかならない。したがって、まさしくその一つの階級を支配階級にするところの諸関係の観念的な表現、すなわちこの階級の支配の思想にほかならない。」（マルクス＝エンゲルス『ドイツ・イデオロギー』六六頁、傍点引用者）。

（付記）本稿は「コミュニケーションの生成と精神的交通」（『国家論研究』二一号、一九八三年）を改題し、大幅に改稿したものである。